

玉手山3号墳

1989年7月

柏原市教育委員会

はしがき

玉手山丘陵に位置する玉手山古墳群は、前方後円墳十数基を含む古墳時代前期の古墳群として著名であります。しかし、過去の開発によって約半数が破壊され、残された古墳も良好な状態で残っているとは言い難い状況にあります。

今後は、これら残された古墳を如何に保存し、如何に活用していくかが柏原市にとっての大きな課題であります。玉手山1号墳は、公園として整備するべく、墳丘の範囲確認調査を実施しており、他の古墳も、何らかの保存策を講じていく必要があると考えています。その中で、玉手山3号墳の後円部は市有地になっており、後円部北側に老人福祉センター・やすらぎの園が位置していることから、老人らの憩いの場となっています。今後、より多くの人々に利用していただくためにも、適切な整備をしていかなければなりません。そのため、今回は墳丘の調査とレーダー探査を実施しました。これらの成果を、保存、整備の資料にしていきたいと考えています。

今後とも、市民の方々に文化財に親しんでいただけるように努力していきたいと考えています。御理解、御協力をよろしくお願ひします。

平成元年7月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、柏原市旭ヶ丘1丁目所在の玉手山3号墳において、歴史の歩道設置工事に伴って実施した緊急発掘調査報告である。
2. 調査地は柏原市有地であり、柏原市長 山西敏一の依頼に基づくものである。
3. 調査は、昭和63年11月7日から11月16日まで実施し、12月9日に後円部墳頂のレーダー探査を実施、12月10日に測量図の修正を行なった。
4. 調査、および整理作業は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
5. 本書の編集、執筆、製図、写真は全て安村が担当した。
6. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
7. 調査に際して、老人福祉センター・やすらぎの園の協力を得た。記して感謝する。また、レーダー探査は、非破壊検査株式会社に依頼したものである。
8. 調査、整理の参加者は下記の通りである。

松井隆彦 空山 茂 竹下 賢 奥川滋敏 山田寛顯 北野 重
桑野一幸 寺川 欽 稲岡利彦 児玉章子 南 ゆう子 井上岩次郎
奥野 清 谷口鉄治

非破壊検査株式会社技術開発本部技術サービス課 敷下秀記

目　　次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 玉手山古墳群の現状と展望.....	3
第3章 調査成果.....	7
第4章 地中レーダー探査.....	12
第5章 玉手山3号墳の検討.....	15

第1章 調査に至る経過

昭和63年10月14日付で、柏原市長 山西敏一より、柏原市旭ヶ丘1丁目9番30号所在の老人福祉センター・やすらぎの園の敷地内に設けられている歴史の歩道を改修するための埋蔵文化財発掘通知書が提出された。歴史の歩道は玉手山3号墳後円部北裾から後円部墳頂に登るために設置されており、自然木の階段で造られていた。しかし、腐朽が激しく、利用者が危険な状況にあるため、コンクリート製の擬木に改修したいとの意向であった。

柏原市教育委員会では、この意向を受け、墳丘の残存状態を確認した後、前向きに検討することにした。調査にあたって、現在の歴史の歩道は、既に周囲より20~30cm程度低くなっていることから、歴史の歩道の西側に2個所、東側に1個所のトレンチを設定し、墳丘の残存状態を確認する調査を実施した。

まず、階段のすぐ西側に第1トレンチ、次に更に西側の墳丘下方に第2トレンチ、そして東側に第3トレンチを設定した。各トレンチからは、葺石に使用されていたと考えられる自然石が多数検出されたが、古墳築造時の葺石を留めていると考えられる部分は、ほとんど認められなかった。また、第1、2トレンチからは数点の埴輪片が出土しているが、埴輪列はもちろん、実測可能な破片さえ出土していない。第1、2トレンチでは、墳丘を一部断ち割って墳丘の築成方法についても観察した。それと共に、やすらぎの園本館に隣接する部分で、小規模な崖面が露呈しており、この部分についても精査の後、土層図を作製した。更に、調査に併行して墳丘の100分の1の測量図を作製した。調査は昭和63年11月7日に着手し、16日に終了した。

調査の結果、墳丘表面は過去の流失、削平等によって、葺石や埴輪列がほとんど残っていないことが確認されたため、歴史の歩道の改修を認めることにした。擬木の基礎深度が40cm程度であるため、若干、墳丘を損なうことになるが、他の場所の保存、見学者の安全等を考慮して判断したものである。

なお、歴史の歩道が整備されることによって利用者が増加した場合、後円部墳頂に存在することが予想される埋葬施設の保存問題についても考慮する必要があると考えた。そこで、非破壊検査株式会社に依頼し、12月9日に後円部墳頂の地中レーダー探査を実施した。その結果、後円部墳頂平坦面の南に寄った位置に、竪穴式石室が存在すると予想された。石室の上面は、地表下20~30cmに位置すると考えられるため、将来的には調査を実施し、保存策を講ずる必要があると思われる。しかし、現状では保存が危ぶまれる状況ではなく、緊急調査に迫られている状況の下で調査するよりも、将来の課題としておいたほうが良いと考えている。とりあえず、後円部墳頂に施設を設置することは認めないことにして、現状保存することにした。

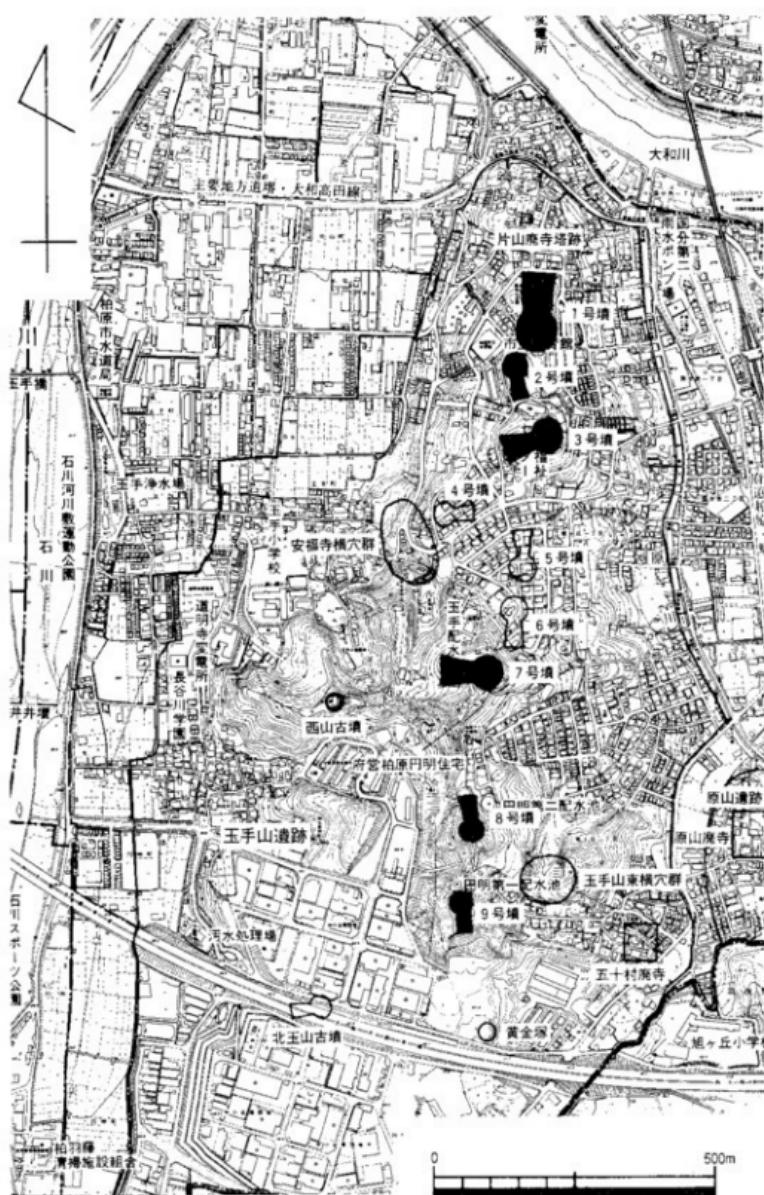


図-1 周辺遺跡分布図

第2章 玉手山古墳群の現状と展望

玉手山古墳群は、北を大和川、東を原川、西を石川によって画された玉手山丘陵上に位置する。古墳時代前期から中期初頭にかけての古墳群として著名であり、十数基の前方後円墳を中心に構成される。それらの古墳は、丘陵の主尾根、もしくは西へ派生した尾根上に築かれている。古墳時代中・後期にも若干の円墳が存在するが、前期のような華やかさは見られない。後期には、安福寺横穴群、玉手山東横穴群も存在する。ところが、前期の主要な古墳は未調査、もしくは調査済みでも未報告のものが多く、著名であるのに反して、実態の不明な点の多い古墳群である。

玉手山丘陵は、以前は緑に覆われた丘陵であったが、現在では見る影も無くなっている。宅地開発、企業団地造成、西名阪自動車道建設等によって、自然が失なわれていった。古墳においても、前方後円墳の玉手山4～6号墳、北王山古墳が破壊され、8、9号墳も半壊状態である。その他の古墳も、改変、一部破壊がみられる。玉手山東横穴群も全壊状況にあり、小古墳などは、未調査のままに多数破壊されているようである。

このような状況下で、我々がなすべきことは、残された古墳を如何に保存し、如何に活用していくかということである。以下、今後の展望について少し触れてみたい。

玉手山1号墳は、その大半が市有地であり、古墳公園として整備する予定である。そのため、1987・88年度に一部で調査を実施した。調査の結果、後円部の規模が確認でき、前方部に粘土櫛が存在すること、後円部南側に埴輪円筒棺が存在することが確認された。今後、整備方法について検討していきたい。

玉手山3号墳は、今回のレーダー探査によって確認された竪穴式石室の保存、公開方法について検討していきたいと思う。前方部が私有地であり、かなり地形改変されていることも問題であるが、当面は現状を維持していきたい。

安福寺横穴群は大阪府の史跡に指定されており、その西端に国分西コミュニティ会館が建設される予定である。この会館建設に伴って、会館に接する5基の横穴周辺を整備、一部を公開することにしており、1990年度に施工したいと考えている。

これらの古墳と、片山庵寺塔跡、安福寺割竹形石棺蓋、安福寺横穴群等をネットワークとした保存、整備計画を進めていく必要がある。長期的視野にたって、地元住民にも価値のある整備を実現させたい。今回の発掘調査、レーダー探査も、貴重な資料となった。このような資料の蓄積が、現在では重要であろう。大和川対岸の高井田横穴群の整備も、1990年度に実現することになった。高井田横穴群の整備と一連のものとした、また、玉手山古墳群の個性を生かした整備を進めていきたい。

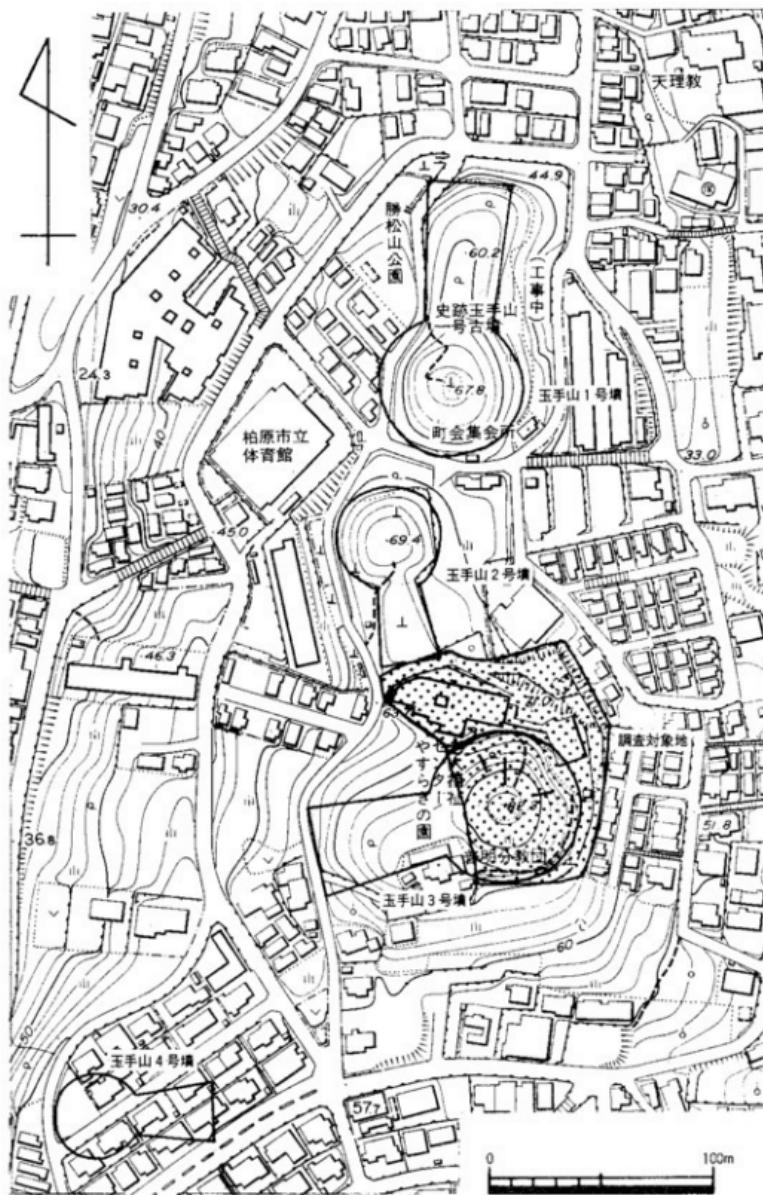


図-2 調査位置図

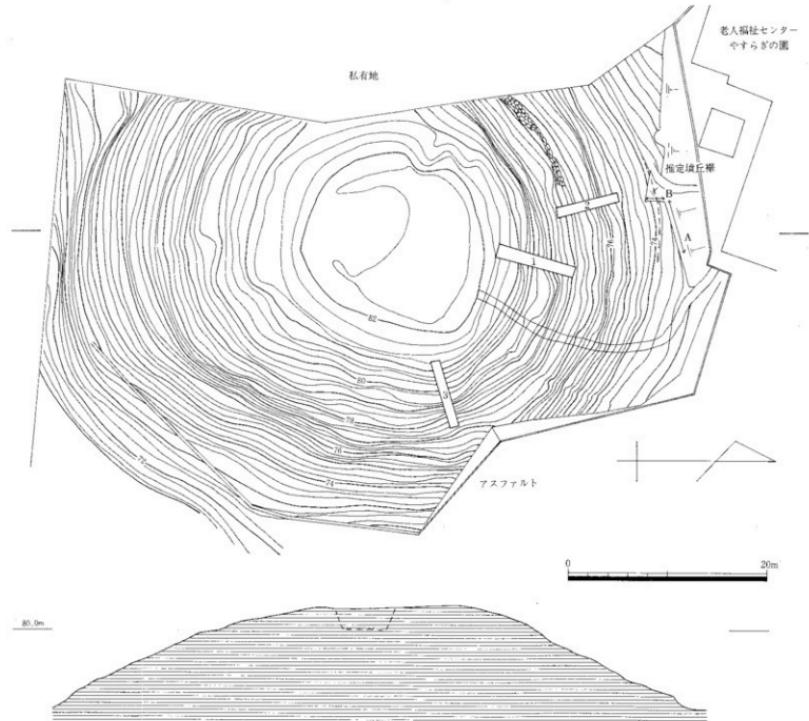


図-3 後円部墳丘測量図

第3章 調査成果

調査は、後円部北斜面に2本、東斜面に1本のトレンチを設定し、実施した。以下、第1～3トレンチの順に、調査の概要を説明する。

1. 第1トレンチ

長さ9m、幅1.5mのトレンチであり、歴史の道のすぐ西側、墳頂部近くに設定した南北方向のトレンチである。トレンチの中央から下方にかけて、葺石に使用されたと考えられる10cm前後の大きさの礫が多数検出されたが、原位置を留めていると考えられるものは確認できなかつた。礫は円礫もみられるが、亜角礫が多い。小さい礫が多く、葺石に使用されたと断定することもできない。

第1トレンチでは、トレンチの上方で長さ6m、幅0.5m、深さ1.2mにわたって、墳丘を断ち割り、墳丘断面を観察した。墳丘は赤褐色～灰褐色系の粘質土と黄褐色系の砂質土によって構築されており、特に赤褐色粘質土が多用されている。また、墳丘中心部に近くなると、水平な層をなす丁寧な盛土がなされているようであり、後円部墳頂部近くでは、厚さ20cm前後の見事な水平層がみられる。一方、墳丘表面近くでは、斜方向の厚い土層がみられ、墳丘の構築は難である。葺石の遺存状態が悪いことから、墳丘の封土は、かなり流失していると思われる。また、第1トレンチでは地山が確認できておらず、後円部墳頂部近くでは1.3m以上の盛土が、なされていることになる。

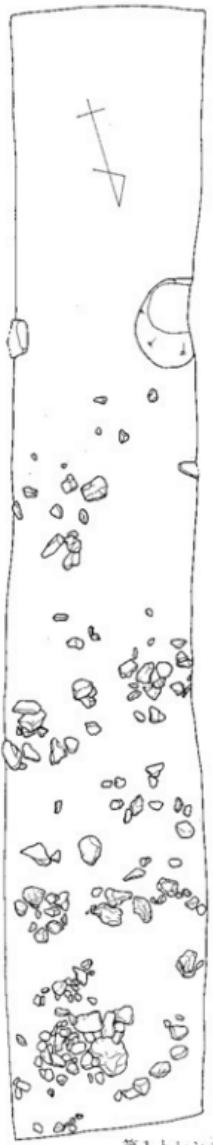
第1トレンチからは、少量の円筒埴輪片が出土しているが、図化可能なものは見られない。

2. 第2トレンチ

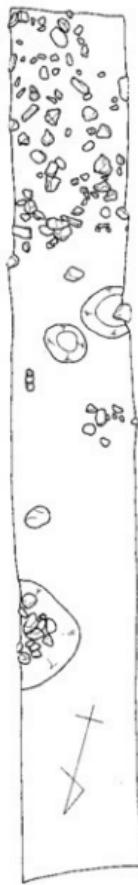
第2トレンチは、第1トレンチの西側下方に設定した長さ7m、幅1mのトレンチである。トレンチの上方で、10cm前後の礫が多数検出されているが、やはり原位置を留めているものを確認できず、礫も小さい。

第2トレンチでは、トレンチの下方で長さ4.5m、幅0.5m、深さ1.3mの範囲で墳丘を断ち割り、墳丘断面を観察した。墳丘は、第1トレンチと同様に赤褐色～褐色系の粘質土と黄褐色系の砂質土によって構築されているが、第2トレンチでは、黄褐色砂質土が多用されている。土層の単位は細かく、基本的には水平層をなし、墳丘中心部から外側へ向けて盛土がなされているようである。また、第2トレンチでは、地山を確認している。地山は緩やかに傾斜しており、平均14°の傾斜で後円部の中心に向かって高くなっている。第2トレンチで確認した地山上の墳丘盛土は0.1～1.3mの厚さである。

第2トレンチからも、円筒埴輪の小片が数点出土しているが、表面の磨滅が著しく、図化不能であった。



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



図-4 トレンチ平面図

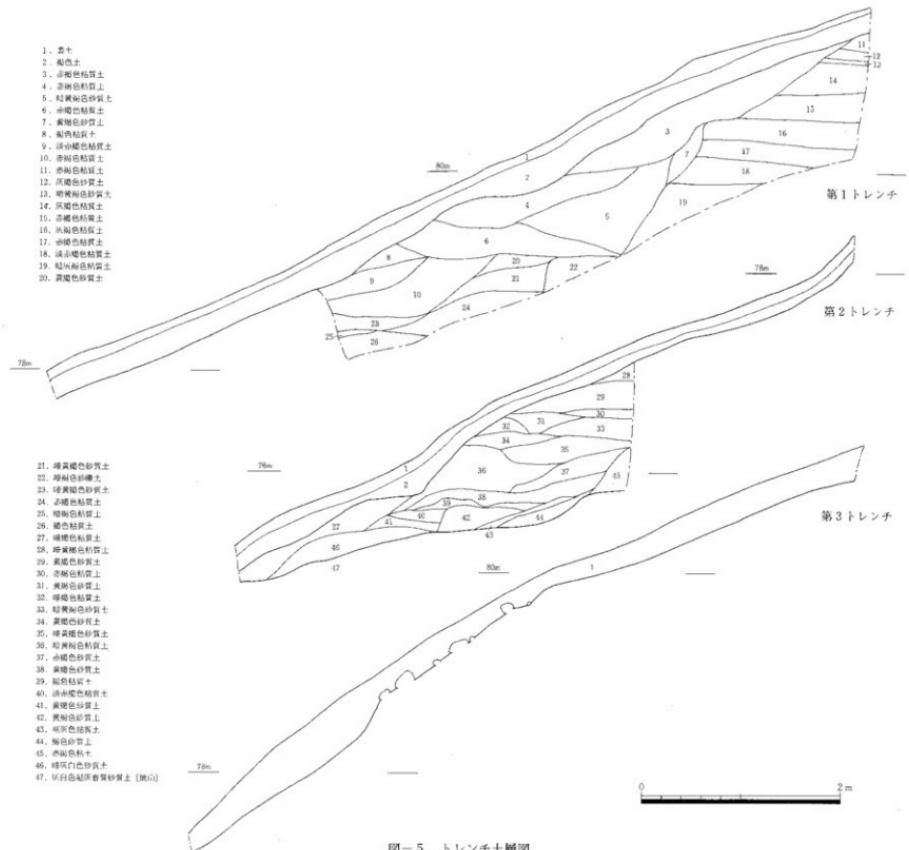


図-5 トレンチ土層図

3. 第3トレンチ

第3トレンチは、後円部東斜面に設定した長さ8m、幅1mのトレンチである。地表下20~40cmで墳丘封土に達し、トレンチの中央から下方にかけて、葺石が残存していた。葺石は20cm前後の大きさを測り、亜角礫、もしくは亜円礫である。葺石は幅4mにわたって残存していたが、転落や原位置を動いているものも多いと思われる。葺石が残存していた部分の直下では、墳丘封土が抉られたように流失しており、葺石の残存は見られない。しかし、基底石と考えられる葺石が認められないので、葺石は更に下方に続いていたものと思われる。第3トレンチでは墳丘の断ち割りを行っていない。また、埴輪は全く出土していない。

4. 墳丘北側断面

墳丘の北側は、やすらぎの園の建設や植栽によって、若干削平されている。そこで、削平され、崖面を呈している部分の断面土層図を作成した。東西方向の土層図をA、南北方向の土層図をBとしている。(図-3)

土層Aは褐色土、暗赤褐色粘質土の直下で灰白色凝灰岩質砂質土の地山が認められる。暗赤褐色粘質土には葺石と考えられる礫を多数含んでおり、墳丘の崩壊土と考えられる。土層Aでは墳丘封土が認められず、地山にも人為的な加工は認められなかった。更に西側の東西断面でも、同様な上層が観察される。

土層Bでは、南側で赤褐色粘質土の墳丘封土が確認できる。この封土は、地山をカットしている部分で途切れている。このカット部分で地山は平坦面をなしている。このカットが、いつの時期になされたものであるか不明であるが、土層A、Bの観察から、この部分が墳丘基底部である可能性が考えられる。少なくとも、これより外側に墳丘基底部が存在したことが確実である。

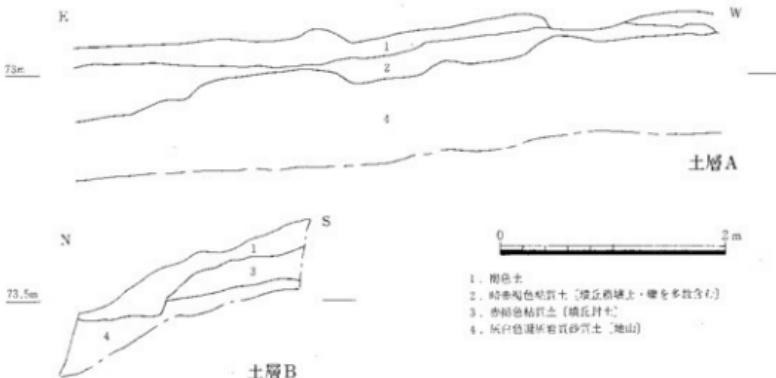
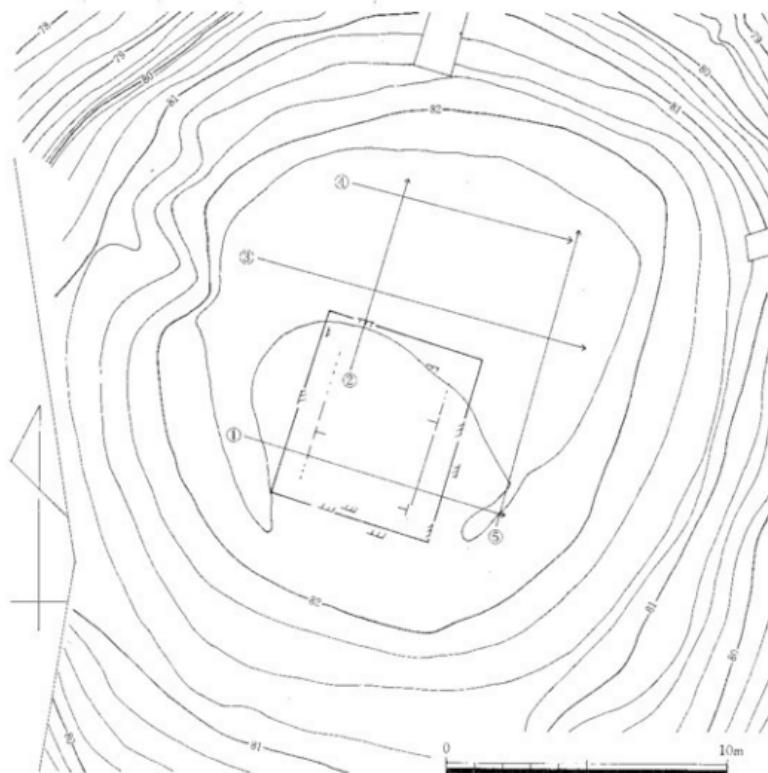


図-6 墳丘北側断面土層図

第4章 地中レーダー探査

玉手山3号墳の後円部墳頂は、直径15m前後の平坦面をなしている。墳頂には安山岩の板石が散布しており、堅穴式石室を埋葬施設とすることは予想されたが、墳頂がかなり削平されていると考えられることから、石室が残存しているかどうかかも疑問であった。今回の調査は墳頂への階段を改修するためのものであり、墳頂部には直接の影響を与えないが、今後の墳頂部の利用方法を考えるために、墳頂部の地中レーダー探査を実施することにした。レーダー探査であれば短期間で実施でき、しかも、今後の調査、利用法の指針になると考えたためである。レーダー探査は、非破壊検査株式会社に依頼し、1988年12月9日に実施した。



レーダー探査は墳頂平坦部を概ね2～3mの格子状に、地中レーダーのアンテナを走査することによって実施した。アンテナの移動に伴い、地中断面像が地中レーダー本体のブラウン管上に表示される。この表示を読み取ることによって、遺構等の地層変化部の検出を行なう方法である。この方法によって、平坦部中央から南側にかけて竪穴式石室と考えられる遺構が確認されたため、その周辺に再度アンテナを走査させ、地中断面像を読み取ることによって、墓壇の上面、下面の推定位置にマークを打つ作業を行なった。この作業によって、竪穴式石室の規模を確認した後、精密なデータを得るために、東西方向に3本、南方方向に2本の走査線を設定し、各々のC R T写真を作成し、解析することにした。

まず、竪穴式石室と推定される遺構は、平坦部中央から南側にかけて約6.6m×5.7mの方形の範囲で確認された。この範囲が墓壇の肩部と考えられる。墓壇底部の幅は、東西で約4mと推定される。この竪穴式石室について、走査線①・②でC R T写真を作成した。（図版11）

走査線①は、竪穴式石室を東西方向に横断するものであり、墓壇、石室が明瞭に確認できる。墓壇の上面は6m前後の幅を有し、墓壇壁は約60°の傾斜である。深さは2m程度と考えられ、墓壇肩部は地表下20～30cmに位置する。レーダー探査では、その反応の強さによって青から白まで7種類の色によって表示されるが、最も反応の強い白色の部分が、墓壇の中央で凸状に見られる。この白色は石を示していると考えられ、墓壇中央に石が積み上げられた状態、すなわち竪穴式石室を示していると考えられる。厚さ10cm、長さ50cm程度の板石を積み上げていると予想されるが、レーダー探査の精度にも関わり、どの程度まで信頼できるかは発掘調査を待たねばならない。石室は、幅80cm前後を有し、約60cmの高さまで東西両壁とも直に立ち上がっており、残存状態は良好なようである。しかし、それ以上では壁面が崩壊しているようであり、天井石も残っていないようである。C R T写真を見る限りでは、東西両壁とも西側へ傾いて崩れているようである。また、石室裏込めの反応が比較的弱く、通常の竪穴式石室のように石室裏込めに多数の礫や板石を使用したものではなく、礫混じりの土を入れている可能性も考えられる。

走査線②は、竪穴式石室の北端付近から北側へ向けてアンテナを走査させたものである。墓壇壁は、やはり60°前後の傾斜を示すと考えられ、その内側に板石と考えられる白色の反応が見られる。墓壇の北側では顕著な反応は見られない。竪穴式石室南北方向のC R T写真採取のため、南北方向に数回走査させたが、良好な資料が得られなかっただけ、南北方向の走査線は②のみである。

この走査線①、②が今回の最も大きな成果であり、これによって竪穴式石室の位置、規模、構造、残存状態等をほぼ推定することができる。なお、竪穴式石室の推定位置は、周囲より10cm前後低くなっている、82.25mのコンターラインにはほぼ一致する。これは、過去の盗掘、石室の崩壊によるものと考えられる。

走査線③は、堅穴式石室の北側を東西方向に走査したものである。地層はほぼ水平層をなすが、西寄りの部分で土坑状の地層の乱れ、東端で東へ下がる地層の乱れらしきものが観察される。（図版11）

走査線④は、走査線③の更に北側を東西方向に走査したものである。遺構状のものは確認できないが、全体にわたって、細かい地層の乱れが見られる。（図版12）

走査線⑤は、堅穴式石室の東側を南北方向に走査したものである。4個所で2m前後の大きな土坑状のものが見られる。（図版12）

走査線③～⑤の成果によって、堅穴式石室は1基のみであることが確認できた。しかし、土坑状の地層の乱れや細かい地層の乱れが多数見られる。これらの地層の乱れが、粘土層等の埋葬施設を示している可能性も考えられる。しかし、これらの反応は埋葬施設を示すような範囲に広がらないことから、その可能性は低いように思う。非破壊検査株式会社の戸下秀記氏は、近傍に樹木等も多く、植樹等に関係するものと考えている。もう一つの可能性として、墳丘の盛土を示している可能性を考えておきたい。墳丘は第1、2トレンチの断面から、細かい単位で、基本的には水平に盛土されていると考えられる。その盛土に際しては、粘質土と砂質土を併用しており、土質の差が微妙な反応となって現われていることも考えられる。特に、走査線④の微妙な地層の乱れなどは、これを示しているのではないかと思われる。

以上の成果から、堅穴式石室が墳頂平坦部の南寄りに位置していることが確認できたが、当然のことながら、北寄りにも埋葬施設が存在するのではないかと予想される。それが粘土層であるならば、削平され、消失しているのであろうか。もしくは、粘土層のような場合、レーダー探査では限界があるのであろうか。将来の調査を待ちたい。

レーダー探査は、短期間で、しかも発掘することなく地下の遺構が予想できる簡便な方法である。しかし、その精度には限界があると考えられ、戸下氏も、レーダー探査で全体像を把握し、発掘することによって効率のよい調査が可能となると報告している。また、いくつかの問題点もある。一つは、アンテナを台車に乗せて移動するため、石や木などの障害物によって台車が浮いた場合など、信号が途切れ、正確なデータが得られない。よって、平坦地では有効であるが、斜面地では、その使用が困難となる。更に、全ての資料が記録として残らず、C R T写真を採取した場合のみ記録として残る方法にも問題がある。これらの点が、今後、改善されることを望んでいる。いずれにしても、今回のレーダー探査では大きな成果が得られ、将来の発掘調査による検証が楽しみである。

註 C R T写真的横軸はアンテナの移動距離（単位m）、縦軸は電波の伝播時間（単位ns・ナノセント）である。1nsは 1×10^{-9} 秒であり、岡西地方の電波の上中における伝播速度は一般に $1\text{ m} = 25 \sim 30\text{ ns}$ である。縦軸の目盛りは10ns毎であり、推定深度を併記している。

第5章 玉手山3号墳の検討

1. 墳丘

墳丘北側断面で作成した土層図Bから、後円部基底部はT.P.73.4m付近と推定される。墳丘測量図を見る限りでは、後円部墳頂平坦面の中央、竪穴式石室の北端付近に後円部の中心が位置するとと思われる。そこで後円部を復元してみると、直径52mとなるが、後円部南側では77mの等高線付近に後円部基底部が位置することになり、非常に不自然である。後世に3.6mもの盛土がなされているとは考え難く、地形から考えてみても、後円部の北側と南側の基底部で3m近い比高差があるとは考えられない。これは、後円部中心の位置設定に問題があるのではないかだろうか。

次に、推定竪穴式石室の対角線の交点を後円部の中心と仮定してみると、後円部の直径は、59.2mとなる。後円部南側の基底部は74mの等高線付近となり、北側とほぼ同じ高さとなる。東側では72~73m付近となるが、東側は後世の削平が顕著であり、1~2m削平されたと考えれば問題ないであろう。また、この推定復元による基底部は、後円部の東側から南側へかけてくの字状に続く側溝にはば一致し、過去には、この側溝に沿って、里道が通っていた。以上のような状況から、この復元が、本来の姿に近いものと思われる。もう一度整理すると、後円部の中心は推定竪穴式石室の中心にあり、基底部はT.P.73.4m、後円部直径59.2m、後円部の(1)現在の高さは約9mとなる。

しかし、このように復元すると、後円部墳頂付近の等高線の乱れが問題となる。79mの等高線以下では問題はないが、それ以上の等高線が北へ張り出していることになる。これは、後円部が北へ拡張された結果ではないだろうか。本来、後円部に竪穴式石室のみが存在したが、別の埋葬施設を策くに当たって、墳頂部を北側へ拡張したために、等高線に乱れが生じているのではないだろうか。その際には、竪穴式石室北端付近を後円部の中心と設定しているようである。後円部北側の79~81mの等高線が密になっていることも、拡張の結果ではないだろうか。調査結果からこれを直接示すものは見られないが、1トレンチの墳丘断面で、墳丘中心部は丁寧に構築されているが、墳丘表面の盛上がりが難であることが確認されており、墳丘表面の上方から流し込んだような土層は、後円部の拡張に伴うものかもしれない。

しかし、これを確認するためには、かなり大規模な調査が必要となり、現状では推定に留めざるを得ない。墳丘の一部を拡張した古墳は類例に乏しく、古墳築造当時から変則な墳形をした古墳であった可能性も残しておきたい。ただし、その場合でも、後円部の中心を2個所に設定していることは確実と思われ、注目すべき古墳であることに違いはない。細かく検討すると、同様な古墳が他にも存在するかもしれない。

後円部は同時期の他の例から、三段築成ではないかと推定されるが、埴輪列が全く残っておらず、葺石の残存状態も悪いことから、段築を確認することはできなかった。墳丘測量図と断面図から推定すると、76mと80mの等高線付近にテラスが存在したのではないかと予想されるが、確実なことは不明である。

現状では後円部と前方部の墳頂の比高差が約6mあり、かなり比高差は大きい。前方部は南側が大きく削平されており、未調査でもあるため、その規模、形態は不明である。仮に、後円部基底部のT.P.73.4mを前方部の基底部とすると、前方部が著しく短くなる。おそらく、更に一段、下方にめぐらせて前方部としているのであろう。

次に墳丘の築成方法について考えてみると、第2トレンチの調査成果から、地山の傾斜は14°前後と推定される。この傾斜が後円部全体に見られるとは考えられないが、仮に後円部の中心までこの傾斜であると仮定すると、後円部中心の地山の高さはT.P.80.6mとなり、地山上に1.7mの盛土がなされていることになる。このように推定するならば、堅穴式石室の墓壙底は地山に達していることになる。また、同様に仮定するならば、後円部北側の80mの等高線付近で盛土の厚さは最大となり、3.6m前後の厚さになると推定される。第1トレンチの調査でも、地山は確認できておらず、1.3m以上の盛土がなされていることが判明している。

玉手山9号墳では、現状での後円部墳頂の盛土は0.8mであり、盛土の最も厚い部分でも2m程度と予想される。⁽²⁾玉手山1号墳では、墳頂部付近は不明であるが、後円部の盛土は最大で4m以上と推定される。⁽³⁾玉手山3号墳は、その中間の数値を示している。

また、盛土の施し方は、後円部の中心部から外へ向けて、薄い水平層を何度も積み重ねていく方法をとっているようである。部分的な調査であるため、確実なことは言えないが、玉手山9号墳も同様な方法をとっているようである。玉手山1号墳でも、基本的には同じであるが、墳丘の周囲を固めた後、内側へ盛土する方法も部分的に採用しているようである。

2. 埋葬施設

レーダー探査によって確認された堅穴式石室の墓壙は、6.6×5.7mの規模を有する。南北方向にやや長いことから、頭位を北に向けて埋葬されたと予想される。石室の主軸は、磁北から約16°、真北から約10°東に振っている。

ここで問題となるのは、堅穴式石室の墓壙が通例よりも小さい点である。玉手山9号墳の場合には9.3×6.0mであり、他の古墳の例をみても、大部分が長さ8~10m、幅5~6mにおさまる。幅は問題ないが長さがかなり短いことになる。一方、石室の内法は、玉手山9号墳では長さが5.58m、幅が0.92~1.28mとなり、他例をみると、長さは5.5~6.5m、幅が1m前後となる。つまり、石室の長さは、墓壙の長さより3~3.5m程度短いのが一般的であり、玉手山3号墳の墓壙長が6.6mであることから、石室の長さは3.3m前後になると推定される。石室幅はレーダー探査によって0.8m前後と推定できるが、長さが確認できていないため、3.3mという

数値が、どこまで現実に近いものか不明であるが、通常の竪穴式石室より、かなり短いのは確かであろう。このように考えると、棺形態が割竹形木棺ではないのではないかという疑問が生じてくる。棺は安福寺境内に置かれている割竹形石棺だったのでないだろうか。この割竹形石棺は石棺の蓋にあたり、玉手山3号墳の後円部から出土したと伝えられている。出土時期や出土状況は未詳であるが、伝えどおり、玉手山3号墳後円部の竪穴式石室から出土したのではないだろうか。石棺は、長さ2.56m、幅0.8~0.9mであり、竪穴式石室内に見事に納まる予想される。石棺は香川県鷺ノ山産の凝灰岩で造られており、凸線で画された側面に、直弧文の線刻がめぐっている優品である。一方、割竹形石棺の身については、その所在が知られておらず、石室内に残っている可能性も考えられる。しかし、レーダー探査では反応がみられず、将来の発掘調査に委ねることになる。

次の問題になるのは、竪穴式石室北側の平坦部である。この平坦部にも埋葬施設が存在したと考えるのが自然であろう。玉手山古墳群において、後円部に2基の埋葬施設を有する古墳は、玉手山5号墳と6号墳である。5号墳では竪穴式石室と粘土櫛が、6号墳では2基の竪穴式石室が存在した。いずれも未報告であるため、詳細は不明であるが、このような類例から2基の埋葬施設が存在しても問題はない。そして、その埋葬施設は、レーダー探査の結果から竪穴式石室とは考えられず、粘土櫛と推定される。玉手山古墳群の埋葬施設は南北方向をとるものが多いので、粘土櫛が竪穴式石室の北側に、石室と軸を同じくして存在したのではないかと推定される。⁽⁴⁾また、後円部に粘土櫛が存在し、盾、鐵器類が若干出土したという記載がある。内容が詳述されておらず、事実関係の確認もできないが、これが事実であるならば、この粘土櫛が竪穴式石室の北側に存在したのではないかと考えられる。しかし、レーダー探査では確認できおらず、削平されたものかどうか、今後の課題である。

3. 墳輪

今回の調査では埴輪はほとんど出土しておらず、わずかな資料も残存状態が悪く、参考にならない。よって、これまでの周辺の出土資料、寄贈資料等によって、その概略を記述しておく。円筒埴輪は器壁が薄く、比較的高い凸帯を有する。外面調整は、タテハケ後のナデによって調整し、内面的調整も基本的には同じである。形象埴輪では、蓋形埴輪が認められる。注目されるのは、壺形埴輪と考えられる破片が、かなり見られることである。全形は知り得ないが、体部に鈴をめぐらせた壺形であり、鈴は短いものと長いもののが存在するようである。⁽⁵⁾

発掘調査では埴輪列が確認できていないため、埴輪の配列方法等については不明である。玉手山3号墳も、玉手山9号墳などと同様に、埴輪の量は、かなり少ないのでないかと考えられる。壺形埴輪については、玉手山古墳群では、玉手山3号墳以外に確認されていない。柏原市域でみても、大和川対岸の高井田で、数点出土しているのみである。高井田の例では、壺形埴輪の全形を知り得るが、古墳の位置等については不明である。⁽⁶⁾

4.まとめ

玉手山古墳群内における玉手山3号墳の位置付けを試みて、まとめにしたい。柏原市教育委員会で調査を実施した古墳は、玉手山1号墳と9号墳のみであり、8号墳の墳丘測量を実施している。その他に、北玉山古墳、駒ヶ谷宮山古墳は報告書が刊行されており、参考となるが、他の古墳は埋葬施設や副葬品の概略が報告されているのみであり、埴輪や墳形については不明である。よって、玉手山3号墳と比較できるのは、1号墳、9号墳に限られ、8号墳、北玉山古墳、駒ヶ谷宮山古墳、松岳山古墳等を参考にしたい。⁽⁷⁾

まず、埴輪からみると、9号墳、3号墳、1号墳の順に新しくなると考えられる。詳しくは述べないが、器壁の厚さ、調整法、形象埴輪等から、この順序と考えられる。

次に墳形についてみると、玉手山古墳群の古墳は、前方部先端があまり広がらず、後円部に比して前方部が低い墳形をとるものが多いようである。玉手山3号墳の場合、後円部と前方部の比高差は6mであったが、9号墳では4m、1号墳では7.5mとなる。墳丘の白色疊散布や板石積み等から1号墳に相前後すると考えられる松岳山古墳では、比高差が10mとなる。これらの資料から、時期が新しくなるほど比高差が大きくなる可能性が考えられ、一般的な概念に逆行することになる。北玉山古墳や駒ヶ谷宮山古墳では、比高差が2m程度であり、必ずしも全てに当てはまるものではない。また、地形に影響されたためとも考えられるが、先述のように、後円部への盛土が9号墳では2m、3号墳では3.6m、1号墳では4m以上と推定され、意識的に後円部を高くする方向へ向かっていたものと考えられる。滑石製の盒子が出土しており、1号墳より若干新しくなるかと考えられる7号墳も、地形図から10m前後の比高差を有するようである。時期不明の8号墳の比高差は6m前後であり、3号墳に近い数値となる。⁽⁸⁾

また、玉手山3号墳では、前方部にのみ更に下方に1段の墳丘をめぐらせることによって前方後円墳の墳形をとっていたのではないかと考えたが、玉手山1号墳や松岳山古墳も同様な構築であったと予想されている。

前方部に比して後円部が高いこと、また前方部下方に1段の墳丘をめぐらせることなどは、玉手山古墳群の特徴といえる。玉手山古墳群の保守性と言つていいかもしれない。玉手山古墳群の性格を知る鍵が、この辺にもあるのであろう。ただ、埋葬施設、副葬品、葺石等において玉手山古墳群と異なる松岳山古墳を同一視するのは問題であろう。松岳山古墳群に対しては、異なる評価が与えられるべきであろう。しかし、両古墳群が全く異なるものではなく、墳形等において交流が見されることも注意しておく必要があるだろう。

今回は、墳丘の一部の調査、後円部の測量、レーダー探査を実施したのみであるが、予想以上の成果があった。最後に、玉手山9号墳が4世紀中葉、玉手山1号墳が4世紀末葉、その間を埋める玉手山3号墳が4世紀後葉墳になるのではないかという筆者の見通しを記して、諸氏の御批判を頂きたいと思う。

註

- (1) 玉手山3号墳は、全長106m、後円部直径68mとする数値が示されている。
石川昇「大阪府の前方後円墳地名表」『大阪文化誌』16 1983 など
- (2) 柏原市教育委員会『玉手山9号墳』1983
- (3) 柏原市教育委員会『玉手山1号墳範囲確認調査概報』1988
- (4) 石部正志『大阪の古墳』1980 P83・表6「玉手山古墳群一覧」
- (5) 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1983年度』1984
P107・図-59の4・5を口縁部と考えたが、透し孔の一部等である可能性が考えられるため、
体部の可能性が高いと訂正しておきたい。
- (6) 柏原市教育委員会『高井田横穴群I』1986
柏原市教育委員会『高井田横穴群II』1987
- (7) 柏原市教育委員会『玉手山1号墳範囲確認調査概報』1988
柏原市教育委員会『玉手山9号墳』1983
柏原市教育委員会『玉手山8号墳墳丘測量調査概報』1987
関西大学文学部『北玉山古墳』1963
大阪府教育委員会『北玉山前方後円墳発掘調査概報』1966
大阪大学文学部国史研究室『河内における古墳の調査』1964
大阪府教育委員会『河内松岳山古墳の調査』1957
柏原市教育委員会『明神山系遺跡分布調査概報 I』1985
柏原市教育委員会『松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報』1987
- (8) 白神典之「玉手山七号墳採集の石製盒子」『史泉』第56号 1981

図 版



後円部



前方部



北から



南から

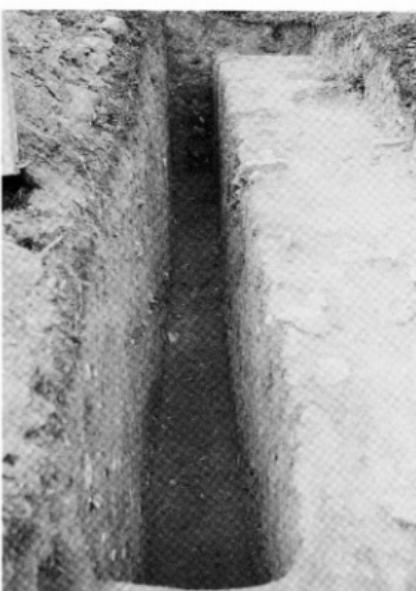


南から

図版3 第1トレンチ



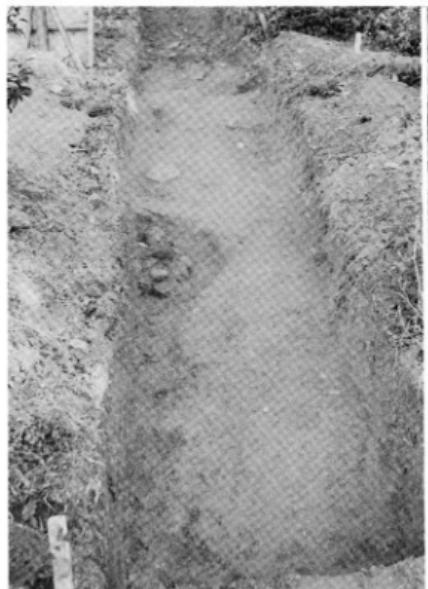
南から



南から



西から



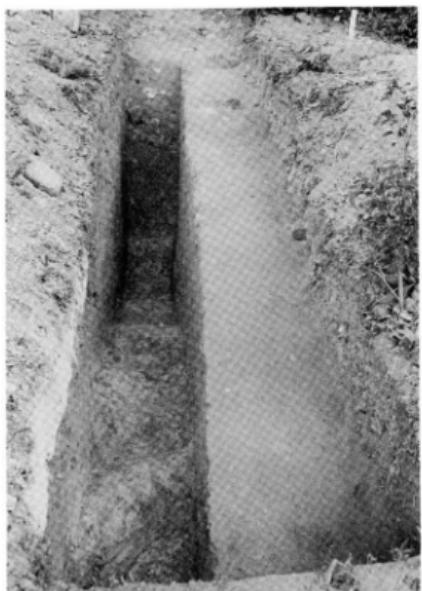
北から



南から



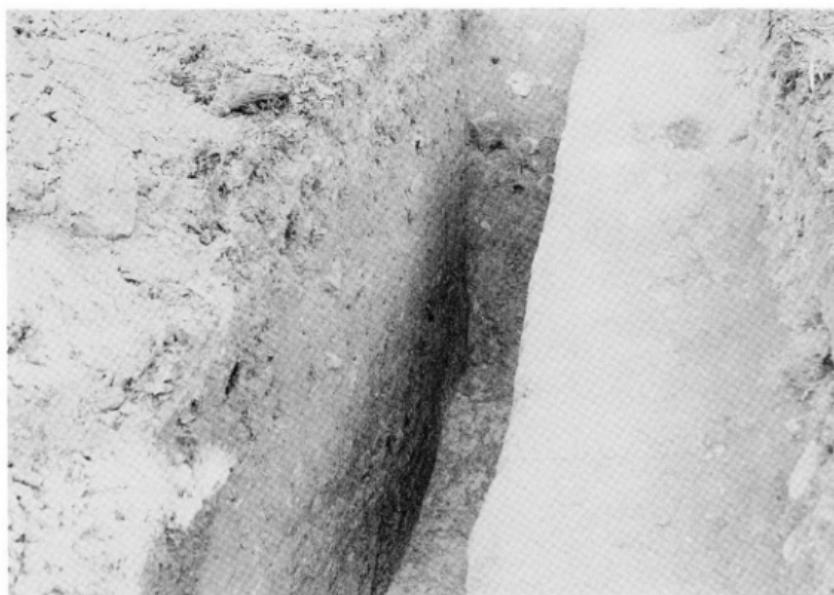
北から



北から



北から



西から



東から

西から



東から



土層A



土層B



後円墳頂から



登り口



後円部掘から

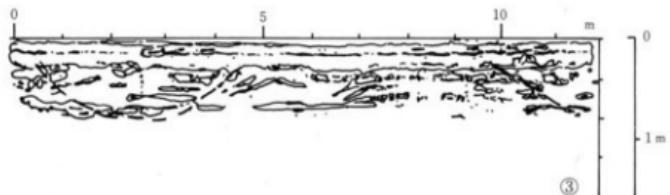
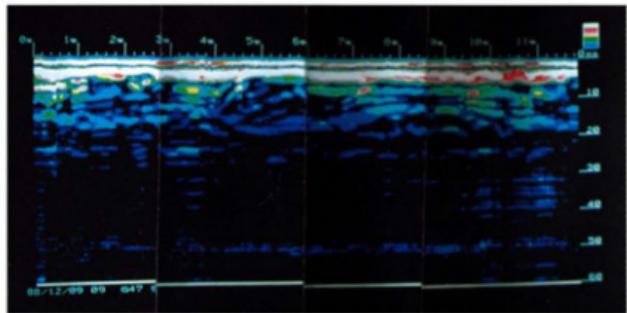
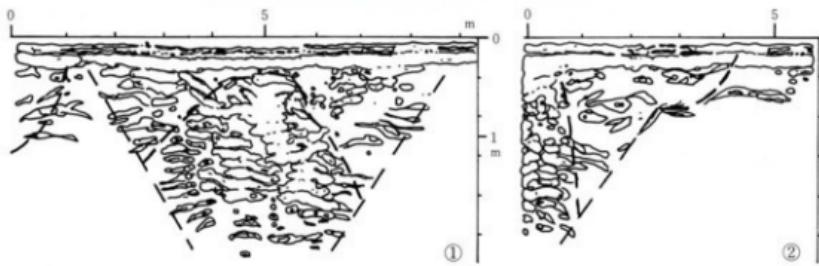
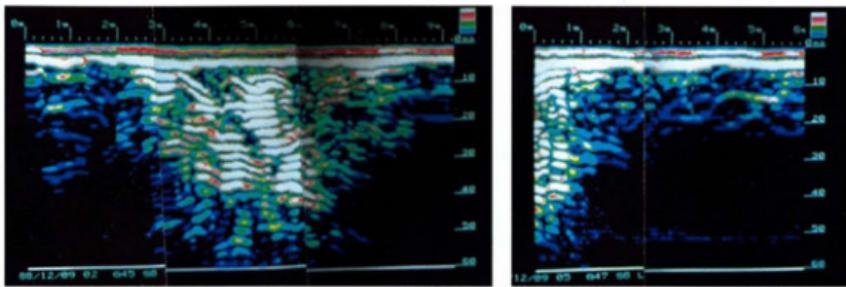


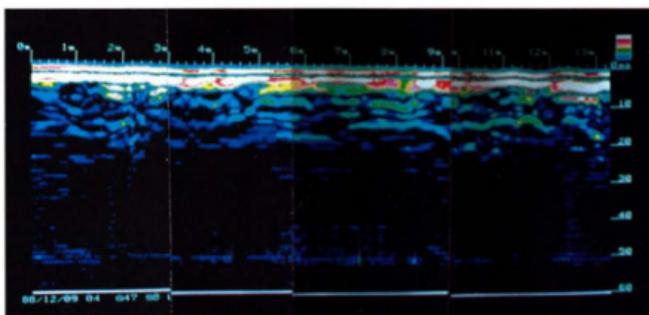
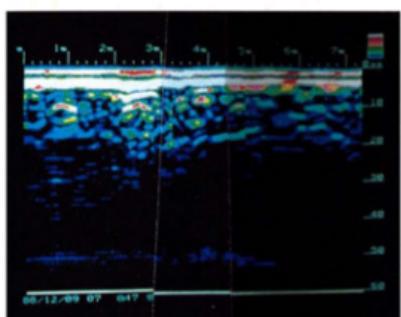
探査風景



探査風景

図版 11
レーダー探査成果



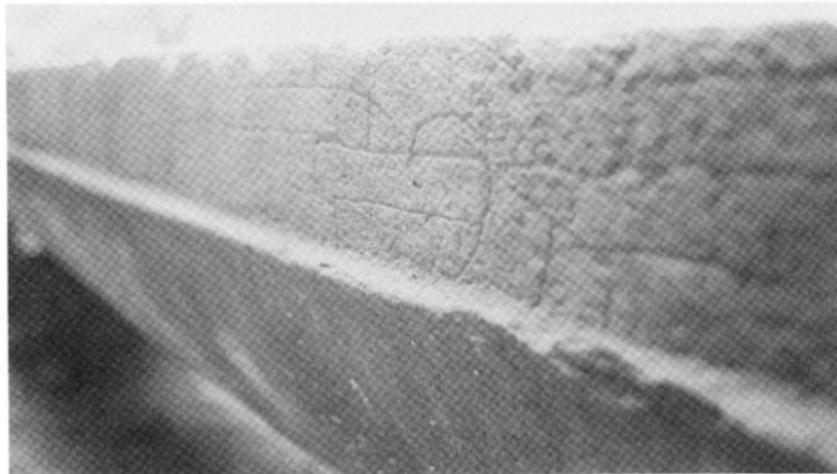




全景



近景



玉手山3号群

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成元年7月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

